

所属：神戸山手大学・神戸山手短期大学図書館

職名：職員

氏名：青木 海青子

#### 1. 調査期間

2011 年 9 月 6 日～8 日

#### 2. 調査のテーマ

みせる図書館 図書館展示について：アイルランドの図書館を見学して

#### 3. 調査訪問先

ダブリン大学トリニティ・カレッジ図書館、アイルランド国立図書館

#### 4. 調査訪問の動機

私が奉職する神戸山手大学・神戸山手短期大学図書館では、大きく 2 種類の特別展示を行っている。ひとつめは、所定の場所（図書館入口に位置する丸テーブル、展示棚）で定期的に行う所蔵資料やその解説の特別展示「ワンテーマ・ライブラリー」である。この展示は図書館入り口の丸テーブルを利用し行う企画展示であり、図書館利用・読書促進、特に新旧の「埋もれた」所蔵資料の利用促進を目的としている。一例としては、過去に在学していた久坂葉子氏に関する貴重書や著作、研究書に関する展示を、中高図書館から一部資料を借り受けて行った。展示のターゲットは主に在学生や地域の方（公開講座受講生）であり、展示目的はかつて山手高女に在学し、活躍した久坂氏の人物や作品、ゆかりの地域により親しんでもらうことだ。

ふたつめは、オープンキャンパスや学園祭等、行事の際に行う特別展示である。オープンキャンパスでは、短期大学キャリア・コミュニケーション学科の企画、要請により、「ブックカフェ」として開放している。ブックカフェでは、その年に授業で扱っている作家やテーマに関わる資料を展示するほか、学科紹介も掲示している。この展示は、キャリア・コミュニケーション学科の教員指導の下、学生が主体となって行っている。

その他、学園祭に映画上演会を行い、関連資料の展示を設置するなどの機会がある。これらの特別展示は志願者や地域の方に向け、所蔵資料を通じて学園を紹介することを目的としている。

このように当館では、空間演出、また利用者・訪問者に働きかける等の意味で、館内展示、掲示が重要な役割を果たしている。しかし上記のようにコンセプトがはっきりしているものもあれば、展示目的や対象利用者層が明確でない場合も多い。展示自体が利用促進に繋がっているか、また想定した効果を達成しているか（例えば、学生の学習に役立つように行ったが、実際に役立ったか）が明確ではない。展示テーマは館員同士で案を出し合って設定するが、発想が偏ってしまいがちな面もある。特に「ワン

テーマ・ライブラリー」については図書館利用・読書促進、新旧の「埋もれた」所蔵資料の利用促進という目的で利用者全般を対象として行っているが、個々の展示については目的設定や、利用者層の焦点設定は明確に行っていないのが現状である。

そこで今回、アイルランドを訪れる機会に、図書館でどのような展示を展開し、利用者に働きかけているか調査を行った。イエイツやジョイスの他、ケルト民話等に触れ、アイルランドの文学、歴史や文化の独特の成り立ちに以前より興味を抱いていた。長らく母国語を話す自由がなかった歴史や、アイルランド独立時に「ケルト」のイメージがナショナリズム高揚の役割を果たしていたこと等が、自国の文化を現在に伝える上で大きく影響するのではないだろうか。その独自性を図書館でどのように取り扱い紹介しているのか、という点に関心があり、アイルランドの図書館展示を見学するに至った。

普段図書館展示を行う際は、主に図書館利用者対象の資料紹介、図書館利用・読書促進を図書館展示の目的としているが、これはかなり大まかな設定であり、利用者に関する業務であれば全てに当てはまるのではないかとも思われる。図書館展示を見学するに当たり、図書館展示にはそもそもどのような種類、目的があり、誰を対象としたものなのかを知り、展示に対しての考え方、観点を整理しておく必要があった。

図書館展示、特に大学図書館での展示についてはいくつかの意義・目的を整理した考え方がある。米澤誠氏は図書館展示の意義\*1を①啓蒙活動、②広報活動、③人材育成活動と大別し、篠塚富士男氏はこの考察を元に、この三つを「展示のねらい」と表現して対象者・グループ、それぞれの展示の意義\*2を付与した。展示のねらいが①啓蒙活動である場合、対象は「展示会観覧者・利用者」であり、展示を行うことで「資料への関心・知識の向上・図書館資料の活用」ができるという意義が生じる。②広報活動の場合、対象は「図書館・大学」であり、「社会へのアピール・地域貢献」に繋がるという意義がある。③人材育成では、「図書館職員」が、「企画力・専門的知識・活性力」を養うことができると説明する。これについては、図書館員以外にも、教員や他部署、学生の協力・意見を取り入れる場合も想定し、図書館展示について考える人材、と捉えることもできそうだ。

これらの効果は重なり合って存在する場合もあるだろう。この大別を照らし合わせ、どの側面が強いかを考慮して展示対象、及ぼす効果を考えながら展示を観察していきたいと思う。

## 5 ダブリン大学トリニティ・カレッジ図書館（旧図書館）

アイルランドでまず訪れたのは、ダブリンの中心に位置するダブリン大学トリニティ・カレッジの図書館である。ダブリン大学トリニティ・カレッジは1592年にエリザベス1世の勅命により設立されて以来400年以上の歴史を持ち、アイルランドの最高学府と言われる。ヨーロッパにおいても最古の名門大学の一つに数えられ、その図書館の蔵書数はアイルランド随一である\*3。トリニティ・カレッジ内では、それぞれ専門分野の資料を扱う図書館と、現在は展示のみに利用されている旧図書館の8つの図書館が運営されている。私はこの内、アイルランド国宝に指定される聖書の手写本『ケルズの書』を展示する旧図書館を見学した。

旧図書館の入口（\*図1）にはまず土産店が配置されており、レジでは学生スタッフが立ち働いている。

土産店、入場料の収益は図書館維持運営に当てられているようだ。トリニティ・カレッジでは学生スタッフ諮問委員会が組織され、学生スタッフが大学運営に深く参画しており、学生スタッフや学内案内ボランティアの姿も多い。筆者が泊まった夏期休暇の間開放している格安の宿泊施設（学生寮）の受付や案内も、夜間でも学生スタッフが行っていた。

土産店の受付で 9 ユーロを支払い入場すると、館員の方が「すみません、どうぞ。」と日本語で声をかけてくれ、日本語のパンフレットを戴いた。パンフレットは英語の他にゲール語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、オランダ語、ロシア語や、近年観光客が増加している中国、日本語のものがあるほか、音声ガイドも用意されていた。旧図書館見学はアイルランドの観光ガイドブックにも載っており、世界中から観光客がやってくる有名な観光スポットの一つなのだ。

トリニティ・カレッジ創立時から図書館は備わっていたが、現存している Old Library は、トーマス・バーフの設計で 1712 年から 1732 年頃に建てられたとされる。<sup>\*4</sup> その中で見学出来るのは、入口の売店、『ケルズの書』等の展示室、そしてかつての開架閲覧室であったロングルームの 3 エリアである。

照明を落とした展示室内に進む。まず『ケルズの書』(\*図 2) の来歴等を説明するキャプション・ルーム”Turning Darkness into Light”があり、奥にガラスケースに納められた『ケルズの書』や、『アーマ一の書』『ダロウの書』が展示されている。独特のケルト文様がページを彩っており、キャプションでこれらの図案の意味を解説している。世界で最も美しい本と称される『ケルズの書』の成立は 9 世紀初頭、アイオナの修道士の手に依るといふ。『ケルズの書』のタイトルは、ミーズ群のケルズで作られたことに由来している。西方の孤島に建つアイオナ修道院がバイキングに襲撃され、修道士達はケルズに逃げ延びて『ケルズの書』を完成させた。トリニティ・カレッジ図書館では 1661 年から、この書を保管している。法学、史学、教育学関係の資料を中心に扱う Berkeley Library（こちらは一般開放されていない。）内にも『ケルズの書』のレプリカ(\*図 3) が展示されていた。

土産店から展示室にかけての 1 階部分は、図書館の開放スペースと哲学科の施設を改装したようだ。展示用に改装されたとあって、博物館展示に近い形である。それぞれ広いスペースではないが、大きなキャプションボードが角度を違えて並んでおり、段階的に視線を誘導し、奥の展示スペースまでの効果的な筋立てがなされていた。照明の効果も手伝って、視界が明るく広がると同時に『ケルズの書』を目にすることになる。”Turning Darkness into Light”を体現している。見せ方だけでなく、トリニティ・カレッジ図書館では資料への負担を最小限に抑えるため、コンサーベーション部門で破損予防、負担軽減の研究が重ねられている<sup>\*5</sup>。展示資料の魅力を最大限に引き出し、同時に負担を最小限に留める仕組みは、特に貴重資料、また通常の資料を展示するに当たり最も重要な点であると感じた。当館でも貴重資料は所蔵しているが、「事後補修」中心、つまり劣化・破損が認められてから策を講じる姿勢だったため、資料劣化の「予防的ケア」を基本とする考え方を知り大変な刺激となった。

2 階へ上がると、旧閲覧室であったロングルームを見学できる。天井までぎっしりと図書の詰まった書架が左右にズラリと現れ、書架を守るように胸像が並んでいる。実際書架の前まで行くことは禁止されているため、本を手取ることはできない。

胸像はトリニティ・カレッジゆかりの人物だそうで、『ガリバー旅行記』の著者ジョナサン・スウィ

フトもここに含まれる。1680年頃、トリニティ・カレッジに通い神学を学んでいたという。展示ケースには、アイルランド独立戦争のきっかけともなった1916年4月24日のイースター蜂起の際、中央郵便局前で読み上げられたアイルランド共和国宣言（ビラのような形態）や、アイルランドに現存している中では最も古い木製のハーブ等、アイルランド史に関わる貴重資料が陳列されている。

入場してみると分かるが、ロングルーム室内は窓が大きく取られており、自然光が差し込んでくる。建築当時はシャッターを降ろせるようになっていたそうだが、現在は太陽光や熱から資料を守るため紫外線遮断シートを窓に貼り付けていると説明を受けた。

この部屋は約65mの長さで、トリニティ・カレッジが所蔵する最古の図書200,000冊が収められているようだ。予防的ケアを中心とした「ロングルーム・プロジェクト」\*6はこれらの貴重書を守るため始まり、現在もトリニティ・カレッジに関わる様々な人によって受け継がれている。館員だけでなく、他部署の職員や教員、学生等、学内のあらゆる層を巻き込んだプロジェクトで、それらが①啓蒙活動にも繋がっている。これも「ロングルーム・プロジェクト」の特徴と言えるのではないだろうか。「ロングルーム・プロジェクト」では豚皮の表紙をドライクリーニングしたり、支えが必要な図書を専用の「ブック・シュー」と呼ばれるケースに収納することで資料の破損を予防する。簡単な作業には、学生スタッフが参画する点も画期的である。資料がどのように劣化・破損するか、どのように補修するか、また自らの通う大学がどれほど貴重な資料を所蔵しているかを目の当たりにすることで、平素からの資料取り扱いや学ぶ意識も変えられる可能性がある。資料補修以外にも学生スタッフが運営に参画していることは、こうした意識付けにも繋がっているようだ。また、予防的ケアを主導するために図書館内でも人材育成のため、様々な取り組みが行われている。コンサーベーション部門を設けて専門職員を育成、専門職員を中心に講習や学生スタッフ指導が行われている。旧図書館の一般公開は、外部にアピールする②広報活動のほかに、利用者への資料保存に関する①啓蒙活動や、図書館内外の③人材育成活動の役割をも果たしているのだ。

## 6. アイルランド国立図書館

アイルランド国立図書館は、トリニティ・カレッジに程近くやはりダブリン中心部に位置する。1877年制定の”the Dublin Science and Art Museum Act”ダブリン科学芸術美術博物館法により、公共利用に供することと同法の目的を達成するために設立された。1881年には政府任命の理事による評議会が上部組織として図書館を監督する協定を結び、この理事には図書館職員も任命されていた。現在では国立文化機関法により、国立博物館は自律的な文化組織として運営されている\*7。

本館の手前に小さなエキシビジョンルームがあり、まずはこちらを見学した。”Discover your National Library”というテーマで、国立図書館所蔵の貴重資料を、電子ブックやパネル等で紹介している。タッチパネル式の電子ブックでその場で読めるもの（\*図4）もあるが、現物資料は設置しておらず、紙媒体で閲覧したい場合は国立図書館本館へ足を運ぶ必要がある。展示資料種別は多岐に渡っており、広告や地図等の一枚物の印刷物、貴重な原稿、古写本、商品の付録、写真、新聞等をアイルランド全土の文字資料やその他記録資料の歴史を紹介しながら体系立てて紹介していく。実物は国立図書館本館に所蔵しており、正に「こんな資料を所蔵していたのか」「国立図書館にはこんな面もあるのか」と意外

な発見ができるような展示内容である。

解説パネルは英語以外に、ゲール語で表記されている (\*図5)。イギリスによる植民地支配の時代には英語の使用が半ば強制され、現在ではアイルランド語は一部の地域を除きほとんど用いられない。アイルランド古来の民話を収集した詩人・W.B.イエイツですら自らはアイルランド語を話せず、通訳を通じて民話を理解していたという。しかし国立図書館内でもしばしばアイルランド語表記が併用され、ホームページや検索ツールもゲール語に切替が可能となっている。

タバコの箱に付録として入っているシガレット・カードのコレクションは、イラストの題材が当時の流行や世相を反映している。1930年代に発行されたコレクションは民話の一場面のように、妖精らのゴブリンらしき姿や、大蛇から逃げる若者が描かれており、アイルランドらしい題材である。他にはスポーツや様々な軍服、街の風景や美人図等がテーマとして選ばれていたという。

1892年に撮影された子供たちの古写真は、アイルランドで貧しい人々の生活環境改善に奔走したジェイムズ・ハック・テューによるものだ。ほとんどの子は質素な服装に裸足で映っており、ブーツを履いていても足先の破れ目から指がのぞいている。こうしたアイルランドの歴史を語る古写真は、国立図書館本館の前にも大型パネルで公開されていた。

キャプションには請求記号が掲載されており、意外な資料の宣伝や利用率向上等、二次資料での展示によって①啓蒙活動や②広報活動に繋げる工夫が散りばめられていた。こちらの展示室で資料に興味を持ち、本館に足を伸ばした、という利用者も少なくないだろう。

エキシビジョンルームを出て国立図書館本館へ移動。現行の特別展示は”Yeats: The Life and Works of William Butler Yeats”と、”Tall Tales and Deadly Drawings”である (\*図6)。国立図書館内に入つてすぐのロビーに、小展示”Tall Tales and Deadly Drawings”が展開されている (\*図7)。ターゲットは児童であり、物語世界や読書への関心を高揚させる内容である。こちらも資料現物ではなく、パネル展示が中心となっており資料そのものは展示されていない。入館ゲート外で展示により資料に興味を喚起、入館して実際に資料に触れるという動線が計算されている。

こちらではアイルランド国内の作家や童話作品を紹介し、国立図書館所蔵の児童書利用促進を図っている。パネルの中には一部が立体になっているものや、動画や図書利用者にお気に入りの児童書のタイトルとその短い感想を集めたものがあり、同年代の児童の目を引く展示となっていた。また国内の新旧の作品を紹介することで大人も懐古を楽しみ、児童書を開けるよう案内している。2011年中はこの展示が行われるそうだ。

W.B.イエイツに関する展示”Yeats: The Life and Works of William Butler Yeats”は図書館内の地下に展示スペースが設けられていた。こちらの展示は、地元紙「アイリッシュ・タイムズ」でも非常に高い評価を得、様々な文化賞に選出されているという。

W.B.イエイツは1865年ダブリンに程近いサンディマウントで生まれ、肖像画家の父・ジョン・B.イエイツの元で育った。アイルランド文芸復興に貢献し、『ケルトの薄明』等を執筆。1923年にはノーベル文学賞を受賞した。神秘主義思想を持ち作品にもそれが顕れているほか、秘密結社を創立してタロット

や占星術に傾倒していたという。\*8

この展示室は、入館ゲートの外側、ブックショップ付近の半地下に設けられ、映像コーナーや、パネル展示、原稿や初版本、愛用の品等の現物資料が展示ケースに収められている。イエイツの家族関係、生い立ちから、国立図書館所蔵のイエイツ原稿コレクション構築の経緯、ケルト民話について、同時代人の紹介、初期、結婚当時、劇作家としてのイエイツ、晩年のイエイツ等、様々な角度と豊富な資料でイエイツを浮かび上がらせている。

1888年、初期のイエイツが詩を発表した雑誌“The Vegetarian”や、イエイツが詩のモデルとした King Goll イラストが掲載された雑誌“The Leisure Time”、また 1886年に書かれ高い評価を得た“The Stolen Child”の清書原稿等、イエイツの詩人、作家としての仕事も時代を追って味わえる。また神秘主義活動に傾倒していた折に自ら作成したタットワカードや、イエイツの詩を音楽と唄という聴覚に訴える形で表現した奏者愛用のハーブ等、図書の中だけに留まらないイエイツの世界の広がりを感じる展示である。映像コーナーは大きいスクリーンのほかに 1、2名のみでじっくりと視聴できる小スペースも設けられている。

映像はイエイツや関連の人物の写真紹介や専門家による解説、ゆかりの地の風景等によりその軌跡を語る。映像コーナーのレイアウトも様々で、イエイツの神秘主義をイメージした祭壇風のものや、戯曲を彷彿とさせる芝居小屋のように演出されたスペースもある。展示形態が現物展示や映像といった種別の中でも規模、展示形態が違い、展示物の性質に即してきめ細かい演出を行うことで、一層展示を引き立てられることを実感した。

## 7 総括

アイルランドにおいて2つの図書館を見学し、その展示機能に着目して視察を行った。今まで図書館展示を一元的にしか捉えていなかったが、展示の幅広いメッセージ性に気付く良いきっかけとなった。

利用者に資料を紹介する、という大枠の対象、目的で行っていたが、展示の内容や方法を通して帰属する場（大学、地域、国等）のアイデンティティを示す等、何かの魅力を発見もしくは再認識してもらう機会になると発見した。資料紹介というのは展示を行うと当然期待できる効果ではあるが、あくまで側面であり、その資料の内容を伝えることこそが本来の目的なのである。資料紹介、でブレーキをかけず、①啓蒙活動となるような実のある展示を行うため、図書館員も展示テーマについて研究を重ね、③人材育成を行う機会として捉えなおしていきたい。そのためにはやはり、個々の展示についても対象、効果を細かく想定し、目的を設定していく必要がある。その上で展示資料を選定し、紹介の仕方や、破損・紛失に備える予防を柔軟に提案したい。

また展示を行う主体は図書館ではあるが、それ以外の人の手によって成長し、様々な効果をもたらすことを発見した。例えば「ロングルーム・プロジェクト」で、ロングルームに納められた貴重書の保全作業に学生が参画していたが、このような図書館職員以外に図書館展示や資料について考える③人材育成は、展示を行うに当たり大きな支えとなるのではないだろうか。本学では長短期、様々な形態で学生インターンシップや、ボランティアスタッフを受け入れる機会がある。展示を行う都度このような学生

達に意見や協力を仰ぐことで、展示に関わった学生から図書館利用の意識や関心が促進されるよう計りたいと思う。

アイルランド国立図書館は資料を配架している館の外にパネルや電子資料による展示を設置していたが、これも取り入れていきたいと考えた。図書館に足を運ぶ利用者は既に資料や読書にいくらか関心があるが、図書館に訪れない学生には内容が届かない。現在でも展示のポスターや目録を他の場所に掲示したり、ホームページに掲載しているが、それを見て、やはり図書館に足を運んでもらう必要がある。ポスターや目録より一歩踏み込んでパネル展示等を館外で行い、展示の中身から来館、資料への関心を呼びかける、という試みも、今後実施を検討したい。特に本学は学舎が1～5号館に別れており、大学の講義が主に行われる3号館とは少し距離がある。距離があっても足を運びたくなるような、強いメッセージを持った展示、またその呼びかけが必要なのである。

図書館で行う展示は、利用者を更に深い興味や気付きへ誘い、資料から資料へ引き寄せる展示であってほしい。そのためには展示を行う図書館員が内容や展示手法、また対象である利用者への理解を深め、明確なメッセージを持って展示を設定していかなければいけない。展示観覧者として、そのような気付きを得た研修であった。

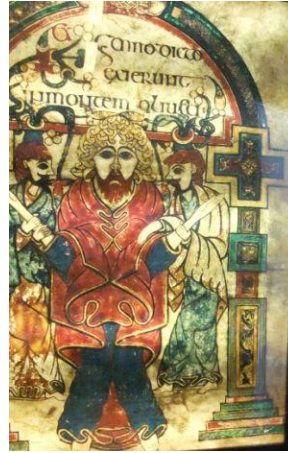
## 8 参考文献

- \*1 米澤誠, 広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法(〈特集〉図書館の発信情報は効果的に伝わっているか?). 情報の科学と技術 2005, 55(7), p.305-309
- \*2 篠塚富士男, 大学図書館における展示会活動: 図書館展示の分析および筑波大学附属図書館の事例報告(〈80号記念特集〉わが図書館のコアコンピタンス). 大学図書館研究 2007, 80, p.43-53
- \*3 トリニティ・カレッジ HP, (<http://www.tcd.ie/> 2011.11.20)
- \*4 アンソニー・ケインズ[ほか], 「治す」から「防ぐ」へ: 西洋古刊本への保存手当て ダブリン・トリニティ・カレッジ図書館における資料保存. 日本図書館協会, 1993, p.15
- \*5 同上 p.6-11
- \*6 同上 p.12
- \*7 アイルランド国立図書館 HP, (<http://www.nli.ie/> 2011.11.15)
- \*8 尾島庄太郎, イエイツ: 人と作品. 研究社出版, 1961

9 参考図一覧



(\*図 1)



(\*図 2)



(\*図 3) Library office にて入館、撮影の許可を  
いただいて撮影。



(\*図 4)





(\*图 5)



(\*图 6)



(\*图 7)